

# 大人が絵本を

## 第87回 絵本が



司書・読書アドバイザー 安藤 宣子\*

小児歯科医師 濱野 良彦\*\*

\* 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)  
\*\* 医療法人元気が湧く 理事フアウンダー

### 絵本抹殺の歴史に迫る

図書館の推薦図書にまでなっていた『ちびくろサンボ』が、ある時一転、絶版となり、資料提供の自由を有する図書館からも消えたのが、1989年のことでした。ことばや絵、文章表現が差別的であると指摘されたことで、何が本質なのか特定されないうちに出版物が消え、そのことが激しい論争となったのです。

しかし、その後『ちびくろサンボ』は絶版の闇からよみがえり、消えた当時の子どもたちから、今の子どもたち、事件を知らない大人たちに至るまで、誰もが自由に読めるようになりました。

絵本の抹殺は、『ちびくろサンボ』ばかりではありません。『ちびくろサンボ』以前にも、以後にも類似の事件は発生しているのです。糾弾を受けた絵本たちに今、スポットライトを当ててみましょう。

### 37年間、闇を彷徨った絵本がよみがえる

『ちびくろサンボ』事件をさらに遡っていくと、古くは長編絵本『ひげのあるおやじたち』絶版回収事件が浮かび上がってきます。福音館書店の雑誌「母の友」で、今江祥智氏が1967年4月号から1968年3月号にかけて連載し、1970年に絵本として発行されると高い評価を得てすぐに増刷されるのですが、部落差別を助長する内容が含まれると部落解放同盟から糾弾され、翌年1月に増刷分が裁断され、絶版となったのです<sup>1)</sup>。

今江氏は、1971年4月の「日本児童文学」誌に反省文を發表し、それから『ひげのあるおやじたち』は姿を消したまま、誰の目にも触れられることなく、完全に抹殺された絵本となってしまいました。しかし2007年、『ちびくろサンボ』復刊までの歳月を遙か

『ひげがあろうが なかろうが』

今江祥智 作  
田島征三 絵  
(解放出版社)



に上回る37年の長い時を経て、再び社会に姿を現したのです。それも、部落解放同盟の出版部門である解放出版社から、『ひげがあろうが なかろうが』の新作で、旧作を携えて劇的な登場を果たしました。

### 差別助長か、歴史的史料か

『ひげがあろうが なかろうが』発行に至った経緯はこうです。絶版、回収、裁断事件から30年余り経ち、そんな騒動も、絵本の存在すら認知されていない社会で、「あれのどこが“差別的”なのか」という声が解放同盟の若手からあがるのです。作品について今江氏が直接、コメントを求められたのは、1997年の5月か6月だったと、読みものとなった新作で、部落史研究に多くの業績を残した故・中尾健次氏が解説しています<sup>1)</sup>。

中尾氏は、「作品の評価は、それが書かれた時代を考慮しなければならないし、それを踏まえた上で、なおかつ現代的価値を見出さねばならない」と述べ、白戸三平氏の『カムイ伝』を引き合いに、二つの作品の発表時期が重なることを踏まえ、次のように指摘しています。「ともに近世社会を舞台に、被差別民を主人公にした作品である。その内容には、明らかに1960年代の部落史研究が反映している」、「“差別を助長する内容”が『ひげのあるおやじたち』にあるとすれば、それは『カムイ伝』も同様であり、当時の部落史研究も同様なのだ。私たちは、そうした反

# 手にするときは！

## 抹殺された!! 後編

企画 濱野 良彦

構成 木須 信生 ※※※

※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)

省を踏まえながら、これらの作品を“貴重な史料”として残し続けなければならない<sup>1)</sup>。

書物とは、先人たちの知恵と研究、創造の記録物であり、記憶物です。そのすべての資料を収集し、保存し、利用に供すること、それが図書館の役割なのです。

### 苦しみは、作者に

今江氏は、絶版に至るまでにいろいろな方に相談し、話し合い、考えあぐねた末の決断と述べていますが、出版物裁断に及ばない議論と、選択肢がなかったのか、苦しく悲しい感情が沸き起こります。

しかし、一番苦しんだのは作者である今江氏ご自身です。当時、落ち込んで書けない日々が続いたこと、そして新作の発表によって「37年ぶりであろうや、また一歩すすめた気がしています」と、『ひげがあろうがなかろうが』のあとがきで吐露しているのです<sup>1)</sup>。残念なことに、著書の再生から8年後、83歳で他界されてしまいました。差別表現を指摘された当時、議論を重ねた戦友の宅間英夫氏、上野 瞭氏、土方 鐵氏へよい報告ができ、なお議論を続けていることと思います。

### 差別を考える素材としての絵本

『ちびくろサンボ』と同じように、人種差別的であると批判された絵本は他にもあります。アメリカで1938年に刊行され、日本では1961年に石井桃子氏の翻訳で福音館書店から出版された『シナの五にんきょうだい』も、その一冊です。

批判されたのは、「絵がヨーロッパ人から見た中国人のステレオタイプをさらに助長するものだ」というものです。①細長の目や弁髪など中国人を戯画



『シナの五にんきょうだい』  
クレール・H・  
ビショップ 文  
クルト・ヴィーゼ 絵  
川本三郎 訳 (瑞雲舎)

化して描いている、②米国社会が中国からの移民労働者に強制した服装が描かれている、そして、③日本では「シナ」という言葉には侵略と差別の歴史がからみついていると問題視する声があがったのです。これを受けて福音館書店は1978年に重版を中止し、絶版となりました<sup>2)</sup>。それは、『ちびくろサンボ』絶版のちょうど10年前のことです。議論は『ちびくろサンボ』ほど過激化しなかったものの、指摘された論点は同じなのです。

そして、『ちびくろサンボ』の復刊に10年先立つ1995年、『シナの五にんきょうだい』は復活するので。復刊を実現させたのは、のちに岩崎版『ちびくろサンボ』を復刊する瑞雲舎で、文章は川本三郎氏によって改訳されましたが、絵と題名は福音館版のままです。

「『シナ』という表現をあえて使用したのは、美しい『中国の呼称』として復権し、再生してほしいという願いがこめられている」と、絵本の巻末で瑞雲舎社長は説明しています。さらに、服装、風俗が、過去の偏見に基づくステレオタイプで描かれ、差別を助長するとの指摘があると述べた上で、「人種差別について、いっそうのご理解を」と復刊当時、記しています<sup>2)</sup>。

行き過ぎた配慮によって出版物を抹殺するのではなく、差別を考える素材として活用する手段もあるというわけです。



## 差別表現の問題と、図書館の自由

差別と表現の自由について語られるとき、『ちびくろサンボ』と並べられるのが、コロデーの古典『ピノキオ』です。問題となったそもそものは1976年、名古屋市の一市民が、小学館発行『ピノキオ』に障がい者を差別する表現があるとして出版社へ抗議したことに発します。その人物は、『『障害者』差別の出版物を許さない！ まず『ピノキオ』を洗う会』を発足し、『ピノキオ』の回収・絶版要求を突きつけたのです。

すると出版社が一部回収に応じ、さらに名古屋市立の各図書館も閲覧を事実上不可能な状態にしたのです。杉尾敏明氏は、この時期を『ピノキオ』事件第一期とし、問題を四期に分けて解説しています<sup>3)</sup>。

第二期は、個人や団体の意見や見解・声明が続出し、社会問題化した時期に当たります。『『回収』措置は一種の『検閲』になり、主張者が自己の見解に基づいて『差別図書』ときめつけ、回収をせまることは、言論に対する封殺行為であり、言論に対するファッショ的挑戦であり、これを断じて許すわけにはいかない』とした図書館問題研究会の声明(1976年12月)が代表的なものです。この声明の末尾で同会は、「出版社は『ピノキオ』を抹殺することに協力すべきではなく、正しく、美しく、子どもの読みやすい版を刊行するように求める」と締めくくっています。

その後、種々の団体が集会や研究会、シンポジウムを開いて、この問題を集団的に討論し、正しい問題解決をはかった第三期に移行します。それは名古屋市立図書館の「ひとまずひっこめた」『ピノキオ』をどうするのかという早い時期に解決しなければならない問題と、児童文学『ピノキオ』の評価や障がい者問題の解決など長期的に解決していかなければならない問題を含んでいたと言われていました<sup>3)</sup>。

## 『ピノキオ』問題の結末

名古屋市立図書館が「ひとまずひっこめた」『ピノ

キオ』を、「ピノキオ・コーナー」を設置して問題解決のための具体的活動をはじめた時期が第四期、ひとまずの結末です<sup>3)</sup>。図書館は市民の知る権利を保障する機関で、資料を閲覧できない状態にすることは図書館の責任を放棄することになるのです。差別表現の問題点を検証しつつ、「図書館の自由」を守る努力は、私たち司書の使命なのです。

一時絶版となり、図書館の書架からも消えた『ピノキオ』は、出版社が謝罪し、問題となった差別語を書き換えて再版に至りました。「差別」いう、ことのほかデリケートな問題を糾弾されたら、検証も深めずに本を抹消してきた反省を生かし、図書館員の専門的見地によって本を検閲から救ったケースなのです。だから今なお、子どもたちが『ピノキオ』の物語を読んで楽しみ、劇で表現する喜びまで体験することが存続できているのです。

## 歴史的に人間が犯してきた行為をみつめる

人種差別、部落差別、障がい者差別、性差別、学歴差別、容姿差別、いかなる差別も見逃すわけにはいきません。しかし、物語世界で、そういった差別のない極めて美しい世界ばかりを描くわけにはいかないのです。物語によって人間は善悪について考え、学ぶことができるからです。そのことを知らしめす材料となるのが、絵本であり小説なのです。

しかし、いつの時代にも書物の糾弾は繰り返されています。私が司書職に就いた頃は、『ちびくろサンボ』論争の渦中でしたが、職務中、目の当たりにしたのは、「タンタンの冒険」シリーズを学校図書館の書架から撤去するというものでした。2010年頃のことです。当時、学校で楽しめる数少ない漫画絵本で、子どもたちに人気でした。

排除の理由は、「植民地主義的」で「人種差別的な表現」があるとして、2010年に販売差し止めや、ベルギーの図書館からの撤去を求める民事訴訟が起きたことがきっかけで、英国や米国で同調する抗議の



運動が巻き起こったのです<sup>4)</sup>。問題とされたのはシリーズ2作目の『タンタンのコンゴ探検』で、人種差別だけでなく「動物虐待」も論点でした。

『タンタンのコンゴ探検』  
エルジェ 作  
川口恵子 訳  
(福音館書店)



シリーズは、少年タンタンが世界中を旅する冒険物語で、ベルギーのブリュッセルで新聞記者をしていたエルジェが作者です。第2巻はコンゴ民主共和国が舞台で、エルジェが見てきた時代と世界が描かれているのです。出版された1931年当時、ベルギー領だったコンゴのそのままの姿は、歴史の理解にもつながります。動物保護の概念もない時代です。

松居直論に寄る「絵本は子どもに読ませる本ではなく、大人が子どもに読んであげる本」の中に、答えはあります<sup>5)</sup>。大人の介入によって、子どもの理解を促進できるのです。絵本の時代背景や歴史を、現代の子どもたちが正しく学ぶ因子は、大人に他なりません。絵本に描かれた史実は、人間が行ってきた過ちに気づかせてくれる貴重な教材なのです。

日本語版を発行している福音館書店は、本作の冒頭で、「皆さんにぜひとも知っておいてほしい二つの問題が含まれています」と前置きしています。そこには「コンゴの人々の描き方」と「タンタンが動物たちを次々と撃つシーン」について、編集部による注釈が記され、「歴史的に人間が犯してきた愚かな行為をもしっかりと見つめつつ、このシリーズを楽しんでいただければ幸いです」と記しています<sup>6)</sup>。すべての書物は、歴史的史料なのです。



**想像力という真実が絵本にはあるのです**

人気絵本でいえば、『ぞうのババール』シリーズも、

『ババールのしんこんりょこう』が人種差別だという批判を受けました。『白雪姫』は、肌の白さなどを美人と定義していることから、黒人差別、女性差別につながる、『みにくいあひるの子』は、美こそ善という誤った概念、『こぶとりじいさん』は、身体的特徴で善悪を判断する偏見と障がい者差別という指摘があります<sup>7)</sup>。『ドリトル先生航海記』、『ハックルベリー・フィンの冒険』、漫画『はだしのゲン』も事件に発展しています。

差別表記問題でもっともショッキングだったのは、ローラ・インガルス・ワイルダーの名前を児童文学賞の名称から外すと、米国図書館協会の児童サービス部会(ALSC)が2018年に発表したことでした。『大草原の小さな家』シリーズに、反先住民、反黒人の感情が含まれることが理由とされたのです。1867年に生まれ、1957年までの生涯において、想像を豊かに羽ばたかせる物語を綴った偉大な作家に対して、この時代に何を言うのでしょうか。「現代的価値を見出せる」作品であり、その作者へ、何という待遇でしょうか。時代背景は考えられたのでしょうか。作品を抹殺することよりも、もっともっと胸を締め付けられる発表でした。

想像力という真実が絵本にはあって、歴史的な背景をも打ち破る作家の、真実の創作活動のうえに今、私たちは想像する楽しみをいただいているのです。



#### 文献

- 1) 今江祥智：ひげがあろうがなかろうが、解放出版社、東京、p.625-639、2007。
- 2) 朝日新聞社：差別考える素材にと再刊-中国人の兄弟描く絵本、朝日新聞社、東京、朝日新聞1995年11月18日夕刊。
- 3) 杉尾敏明、棚橋美代子：ちびくろサンボとピノキオ-差別と表現・教育の自由、青木書店、東京、p.96-128、1990。
- 4) AFP通信：『タンタンのコンゴ探検』は人種差別的、図書館からの撤去求める ベルギー、AFP BB News HP <https://www.afpbb.com/articles/-/2776757>、2010/11/26
- 5) 松居直：絵本のよろこび、NHK出版、東京、p.19、2003。
- 6) エルジェ 作、川口恵子 訳：タンタンのコンゴ探検、福音館書店、東京、2011。
- 7) 週刊文春 編：徹底追及「言葉狩り」と差別、文芸春秋、東京、pp.51-56、1994。